



あなたとしての 私を

学校長

飯山 等

毎日の食事が私を育ててくれます。その食事は、単に車にとってのガソリンではありません。私と成り、私を保持し、私を日々更新してくれているのです。数日、数ヶ月の間で、私を構成する組織は代謝しています。食物が消化摂取されて、血や骨になります。私となります。同じように私の心も、何を見るか、何を聞か、何に触れるかを種として自らを育てていきます。そして、もうすぐ中学生になるあなたの育て主は、ほかでもないあなた自身です。親鸞しんらんというかたはつねづね「弥陀みだの五劫思惟ごこうしゆいの願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」とおっしゃっていたそうです。私は私から始まるのではなく、私を私として成り立たせている《その前》がある。私が私のことを思う、その遙か以前から、私自身が自分を持てあまし、在ることの意味を見出せなくて投げ出してしまいたくなるようなときにも、その私をひとときも見離すことなく、私を「たいせつなあなた」として念い続けてくださっている世界がある。その世界の中に私は在る、と。そのように私はこの言葉を受けとめています。二人の娘が子に恵まれて私も三歳を頭に三人の孫のおじいちゃんです。その娘たちが幼かったとき、父である私はどのような思いで子の成長を受けとめていたのかほとんど記憶はありませんが、今、孫という幼子を通して、誕生したいのちはどれほど深く豊かな呼びかけの世界(それは決して音声としての呼びかけに限りません)によって、いのちの成立と成長が果たされていくのかということに、驚愕と言えるほどに強い感銘を受け続けています。私が私として生きることをたどたく始める《その前》、いのちがもしその世界を持たなかったらと想像すると、灯りのない無底の穴に落ちていくような恐怖すら感じます。私は「あなたとしてのいのち」を生きている。敢えて対語的に言葉を挙げて明確にするならば、「私がいちを生きている」のでも、「いのちが私を生きている」のでもなく、《いのちがあなたを生きている》。その説明不要の真実を、幼いいのちのすがたから教えられ続けています。私たちは誰もが、呼ばれるいのち、すなわち、あなたとしてスタートしている。あなたとして呼びかける、その声に応じてわたしは始まる。それは私の何かを評価してではありません。評価を反映した相対的なものではなく、そのような志向を否定したところに成立する絶対的な尊貴の念、存在そのものへの敬愛としてそれはなされるのです。しかし、私たちはしばしば、私を自分からの発想でとらえて、善いとか悪いとか、役立つかそうでないかと考えてしまいます。他者だけでなく自分自身をさえ選別し、取捨し、利用するという在り方に身を置き、それに値しないという焦燥感、自身を資産的な是として利用できなくなるという不安に囚われてしまいます。そのようなとき、心静かにいのちの《その前》を想起しよう。誰もがすべて、まるごと受容されている世界に有ることを。私にまで繋いでくださったいのちの歴史のなかに、いま在る一人ひとりであることを。

